

シェイクスピアのヘンリー6世劇成立の過程：Part 1

平松 哲司

1

長らくヘンリー6世3部作はシェイクスピアが最初に書いた戯曲としての位置を占めてきた。これに異議を唱える者もいて、シェイクスピアの全作品の執筆順序がそもそも流動的な仮説でしかないが、ヘンリー6世3部作が、シェイクスピアがロンドンで劇作家としてデビューした作品、あるいはデビュー直後に書かれた芝居であることには異論はないようだ。

シェイクスピアの他の史劇には先行する他の劇作家の手になる作品が存在する。*Richard III* 成立の前に作者不明の *The True Tragedy of Richard III* が上演され、かつ出版されている。*Henry IV* 2部作、*Henry V* と同じ歴史上の時期を扱った同じく作者不明の *The Famous Victories of Henry V* が1580年代(1583-88)、シェイクスピアが多分まだロンドンにでてくる前に初演を果たしている。ただヘンリー6世3部作のみが先行する芝居の人気、知名度に頼ることなく、直接 Hall や Holinshed の年代記から新しい劇として語りおこされているのである。しかも3部作というエリザベス・スチュアート朝演劇全体を見渡してもまれな叙事詩的スケールは、どう考えても駆け出しの、新人劇作家のデビュー作品にはふさわしくない。そもそも、1580年代のエリザベス朝「年代記劇」(chronicle plays) の中世訓話、民間伝承的性格と一線を画する真の歴史劇としての「史劇」(history plays) の成立はシェイクスピアのヘンリー6世3部作の誕生によって始まったといっても過言ではないのである。

なにが駆け出し作家のシェイクスピアをしてヘンリー6世という当時の観客の記憶に薄く、“heroic”という言葉が全くふさわしくない国王をタイトルに据えた芝居を書かせたのか。そもそもシェイクスピアはヘンリー6世劇をパート1、2、3の順番で書いたのかにも疑問がある。さらには

「ヘンリー6世3部作」という名称自体が他者の考案したフィクションであり、三つの芝居に構成上の連続性、計画性は希薄であるとする声も聞こえる。事の実態に迫るには、テキストの成立と出版の過程、シェイクスピアが芝居を書いた劇団の特定、1590年代初期の劇団再編成の実態、同時期のフランスへの英国軍派遣との関係など、さまざまな角度からの綿密な検証が必要なようである。

2

まず問題になるのがヘンリー6世3部作のパート1、2、3という構成がシェイクスピア以外の手になるフィクションであるという解釈である。「ヘンリー6世3部作」という現在流布している形が登場したのはシェイクスピアの死後、1623年に出版された the First Folio (以下F1) が最初である。それ以前、ヘンリー6世を主人公としたシェイクスピアの手になると思われる芝居はばらばらの形で登場している。1594年に *The First Part of the Contention betwixt the Two Famous Houses of York and Lancaster* (これ以下 *1 Contention*) というタイトルの芝居が Quarto 版 (以下Q) で出版された。これは『ヘンリー6世パート2』(以下 *2 Henry VI*) の上演に参加した役者達が記憶を頼りに再構築した、いわゆる memorial reconstruction であると考えられている。この memorial reconstruction 説に疑問の声を上げる者も多いが、その代わりになる説得力ある仮説が提示されていない現在、本論では memorial reconstruction 説を採用して話を進めていく。翌1595年 *1 Contention* の明らかな続編である *The True Tragedy of Richard Duke of York* (以下 *The True Tragedy*) というタイトルの芝居が出版された。この芝居はシェイクスピアの『ヘンリー6世パート3』(以下 *3 Henry VI*) の memorial reconstruction と考えられている。*1 Contention* の表紙に作者の名前はないが、*The True Tragedy* の表紙には上演した劇団として Pembroke's Men の名前がある。この二つの芝居は明らかに2部作とし

て書かれたものである。1602年には合本されたものが『ヘンリー6世1部及び2部』として the Stationers' Register に登録され、1619年に出版された Q3 の表紙には “The Whole Contention between the Two Famous Houses, Lancaster and York” とあり、さらに初めて著者としてシェイクスピアの名前が明記されている。1623年の F1 では *1 Contention* と *The True Tragedy* の原本とおぼしき芝居が *2 Henry VI*, *3 Henry VI* の名前で現われ、そして始めて『ヘンリー6世パート1』（以下 *1 Henry VI*）という芝居が冒頭に加わり、3部作のいわゆるサイクル劇 (cycle plays) という新しい装いでお披露目を果たした。

つまり、『ヘンリー6世3部作』というサイクル劇は F1 以降一律に受け入れられるようになったので、1623年以降の F 版がなければ、シェイクスピアが書いたと思われるヘンリー6世の芝居は *1 Contention* と *The True Tragedy* の二つだけであり、今日のテキスト编者の中にはこの名前をもって *2 & 3 Henry VI* の呼称としている例もある。¹ つまり、世間に現われた時間の順序でいえば、*1 Henry VI* は *The Whole Contention* という2部作の prequel として書かれたことになる。ちょうど映画「スター・ウォーズ」パート4～6が先行する3部作の prequel としてあとから書かれたように。

Prequel 説に説得力を与える理由がもう一つある。劇場 the Rose の所有者であり興行主であった Philip Henslowe のいわゆる *Henslowe's Diary* の1592年3月1日の書き込みに “ne Harey the vi” という項目がある。“Ne” は “new” の略である。² 通常これがシェイクスピアのヘンリー6世の芝居のどれかの初演の記録であるというのが大方の見方だが、どの芝居を指しているかまでは確定していない。通常 Henslowe は連作の芝居の第1部の上演を記入するのに “part 1” を省くのが習わしだったので、「新作ヘンリー6世」を F1 の順序を念頭において *1 Henry VI* と解釈することが可能である。その帰結として *2 & 3 Henry VI* は1592年3月1日以降書かれたことになる。

しかしこの筋書きには一つ大きな問題がある。同年9月20日に劇作家 Robert Greene の書いた “Greene’s Groats-worth of Wit” と題する小文が the Stationers’ Register に登録された。このパンフレットは実は Henry Chettle の手になるという説が浮上しているが、今は著者のアイデンティティーは無関係であるので問題にしない。パンフレットの中の新米の劇作家 “Shake-scene” を攻撃している部分で、作者はその「成り上がりものカラス」の芝居の一行をもじった “Tygers hart wrapt in a Players hyde” を引用している。これは 3 *Henry VI* の1幕4場、捕らえられ、なぶりものにされる York が Margaret に向かって放つ “O tiger’s heart wrapped in a woman’s hide”³ のパロディーである。この引用は、9月には 3 *Henry VI* が書かれ、かつ上演された証拠となる。もし F1 の順序でヘンリー6世劇が書かれたと仮定するなら、3月1日の 1 *Henry VI* 初演から少なくとも Greene のパンフレットが登録された9月20日までに 2 & 3 *Henry VI* が書かれ、かつ上演されなければならない。さもなければ Greene は “tiger’s heart” の一行を知ることができなかったはずだし、3 *Henry VI* がロンドンで上演され観客の記憶に新しいものでなければ Greene のパロディーはロンドン劇場界隈のゴシップのインパクトに欠けるものになる。いわゆる prequel 説をとる人達は、3月から9月までの6か月で 2 & 3 *Henry VI* を書きかつ上演することは技術上無理だと考える。さらにこれに拍車をかけるのが6月23日発令の Privy Council による劇場閉鎖命令である。当初の目的は暴動防止であったが、お定まりの疫病蔓延によって劇場再開は当分見合わされ、ロンドンの主要劇団は地方巡業にでかける。つまり F1 ヴァージョンが成立するためには、3月から6月までのあいだに 2 & 3 *Henry VI* が書かれかつ上演されていなくてはならない。⁴ 2 & 3 *Henry VI* が時間的に先に書かれたという prequel 説をとれば、3月以前に 2 & 3 *Henry VI* が書かれかつ上演されたことになる。Greene は 3 *Henry VI* をロンドンのどこかの劇場で観たことになり、F1 の順序に固執した場合の問題は雲散霧消する。

以上のことから判明するのは、ヘンリー6世3部作の成立の過程を解明するにはF1バージョンとprequel説のどちらをとるかという選択が避けて通れないという事実であり、同時にこの問題に何らかの答えを与える作業がとりもなおさずヘンリー6世劇成立の中核にメスを入れることになるということである。

3

まずprequel説の根拠になっている点を確認しよう。(1) 2 & 3 *Henry VI*はQ版が存在するのに、1 *Henry VI*のみQ版が存在せず、突然F1で出現するのは不可思議。F1の3部作をシェイクスピアが当初から計画していたなら、最初に書かれた芝居がなぜ死後7年にいたるまで日の目を全く見なかったのか。(2) Hensloweの“ne Harey the vi”の3月から“Greene’s Groats-worth of Wit”の9月、あるいは劇場閉鎖令の6月までの短期間で2 & 3 *Henry VI*が書かれ、かつ上演されることは不可能。(1)に関して言うと、いくつかの反論が可能である。Q版が全くなく、F1で初めて出版されたシェイクスピアの芝居はほかにたくさんあり、特にまれな現象ではない。とは言え、なぜヘンリー6世3部作のなかで1 *Henry VI*のみF1に至るまで全く出版されなかったことは探究するに値する。考えられるのは著作権の問題である。エリザベス朝時代には今日の著作権に当たるものがなく、戯曲を例にあげれば、芝居の原稿（著者の手書き原稿、プロの書記が清書したもの、あるいは上演台本）を手に入れ、それを印刷所に持ちこんで、身銭をきって出版する一種の投機行為として出版業は成り立っていた。各劇団にとってレパートリーとなった芝居は重要な財産であり、これが出版業者の手に渡らないよう神経をとがらせた。

前に書いたように1 *Contention* と *The True Tragedy* はPembroke’s Menによって上演された。それ以外の劇団が上演した記録はない。数多いエリザベス朝の劇団の中でもPembroke’s Menほど謎の多い、従って

さまざまな憶測の的となる劇団も少ない。ここでは E.K. Chambers らの提示する、1592年の疫病による劇場閉鎖とそれに続く地方巡業開始にともなって、母体である Strange's Men から分離独立した分派が Pembroke's Men とする説をとる。1592年 Strange's Men は前述の通り the Rose に本拠地を置いて Henslowe のマネジメントのもと興行を行っていた。Strange's Men と Pembroke's Men を結ぶ記録はいくつか残っている。“Ne harey the vi” を上演していた頃の Strange's Men は Edward Alleyn の率いる Admiral's Men と合体した事実上一つの劇団として活動していた。1592年から93年の疫病蔓延によるロンドンの劇場閉鎖に伴って主要劇団は地方巡業に出た。Strange's Men も Pembroke's Men もその例にもれない。二つの劇団は時に別行動をとり、時に同じ地方都市で公演している。Strange's/Admiral's Men の巡業に参加していた Alleyn が義理の父である Henslowe に宛た Pembroke's Men の消息を気遣う手紙に、それに対する1593年9月28日の Henslowe の返信に二つの劇団の親密さが色濃く現われている。この時 Pembroke's Men は経済的に破綻寸前の状態にあっただらしく、Henslowe の言葉によると、“they [Pembroke's Men] are all at home [in London] and have been this five or six weeks, for they cannot save their charges with travel as I hear and were fain to pawn their apparel for the charge.”⁵ 1592年の劇場閉鎖でロンドンでの活動を封じられた Strange's Men が Privy Council に提出した直訴にあらわれている、地方巡業に出れば劇団の分裂と離散につながりかねないという懸念が現実となったわけである。

もう一つの Strange's Men と Pembroke's Men を結ぶ線は、1592年暮れから1593年新年にかけての宮廷で恒例の御前公演での Pembroke's Men の衝撃的デビューである。毎年クリスマス・シーズンに招かれてエリザベス、政府高官、各国大使らの前で上演する特権は一握りの劇団にしか与えられていなかった。80年代を通じてその筆頭の地位を占めていたの

は文字どおり「女王陛下の僕」である Queen's Men であった。しかし 1590-91年のクリスマス・シーズンを境にその地位を Queen's Men は Strange's Men に譲った。Strange's Men は1591-92年シーズンで都合6回も芝居を上演し、報酬として一劇団としては新記録の60ポンドを受けとっている。そして翌シーズン、それまで名前さえ記録に残っていない新顔の Pembroke's Men が大劇団である Strange's Men と対等の形で、つまり別報酬で上演している。特筆すべきは、12月26日 St Stephen's Day に Pembroke's Men が上演した事実である。St Stephen's Day は24、25日のキリスト誕生を祝う厳粛な時期が終わり、心待ちにしたクリスマスの楽しみの解禁の日であった。Strange's Men に主役の地位を奪われた1591-92年シーズンですら、Queen's Men は St Stephen's Day に一回だけの上演を許されている。やはり“Queen's Servants”として他の劇団とは別格の特権の成せるわざであろう。その大切な、劇団の暗黙の序列確認の日に、突然現われた無名の劇団が上演を許されるとはどういうことなのか。そもそも Pembroke's Men とはその出自を含めてどんな劇団なのか。一つの可能性として、1590-91年にかけて Queen's Men が二つのグループに分裂したことはよく知られているが、この内の一派が Pembroke's Men の前身であると考えることができる。⁶ ただしこの説の決定的な欠陥は、Pembroke's Men のレパートリーの芝居が全く Queen's Men のそれと重複しないことである。これについては後に詳しく述べる。ここでは、Pembroke's Men は地方巡業に出ざるをえなくなった Strange's Men の分離した役者を中心に結成された新劇団とするのが妥当と考える。Pembroke's Men を、the Theatre を常設劇場とする James, Richard Burbage 親子の劇団とする説もあるが、⁷ 1594年 Lord Chamberlain's Men の代表に名を連ねるまで宮廷記録に Burbage の名前は一切なく、宮廷上演の実績の全くない Richard の率いる劇団が突然クリスマス・シーズンに招かれ、しかも St Stephen's Day に上演を許されるということは常識的に考えられない。

さらに、シェイクスピアの *Titus Andronicus* の1594年の Q1 の表紙には、この芝居が Strange's Men, Pembroke's Men, Sussex's Men の順で上演されたとある。⁸ *Titus Andronicus* のほか、シェイクスピアの *The Taming of the Shrew* と密接な関係にある *The Taming of a Shrew* の1594年出版の Q1 にも Pembroke's Men によって上演されたと表紙に書かれている。つまり Pembroke's Men は *2 & 3 Henry VI* (その memorial reconstruction が *1 Contention* と *The True Tragedy*) のほかに、*Titus Andronicus* と *The Taming of a/the Shrew* をレパートリーの中に持っていたことになる。しかもこれらのシェイクスピアの芝居は、Strange's Men が初演を果たしたと推測できる *1 Henry VI* を加えて、すべて最終的にシェイクスピアの所属した Lord Chamberlain's Men の手に渡っている。加えて、Strange's Men の構成員には Lord Chamberlain's Men の旗揚げ時のメンバーが多く含まれている。1593年5月6日の Privy Council 発行の Strange's Men 地方巡業許可証には William Kemp, Thomas Pope, John Heminges, Augustine Phillips, George Brian らの名前があるが、彼等はすべて翌年に結成された Lord Chamberlain's Men の幹部役者達である。Strange's Men と Pembroke's Men とのあいだで役者の重複、レパートリーの芝居の移譲があったとしても不自然ではない。

もう一つ Strange's Men と Pembroke's Men を結ぶ線がある。*1 Contention* と *The True Tragedy* がそれぞれ *2 Henry VI*, *3 Henry VI* の memorial reconstruction であるという仮定のもとで本論は進行していることは前に言った。劇の上演に参加した役者達が記憶でテキストを再構築しようとするれば、とうぜん記憶の不確かさからさまざまな形で間違いが入りこむ。Memorial reconstruction の特徴的な間違いは、テキストを再現しようとして、役者の所属した劇団のレパートリーの他の芝居の台詞を勘違いして挿入してしまう、recollected passages の存在である。A という芝居を記憶で再現していく過程で期せずして B、C、D、E、F

という芝居の断片が混入してしまうのである。エリザベス朝劇団の日替わりで演目が変わるシステムを維持していく上で、役者は一つの芝居で複数の役をこなし、1シーズンに10を優に越える芝居の台詞をそらんじていなければならない。Memorial reconstructionによるテキストが、役者達が所属していた劇団のレパートリーの内容を伝える貴重な資料となりうる由縁である。ヘンリー6世3部作の現代の編者の多くが *1 Contention* と *The True Tragedy* の recollected passages を巻末に補遺として掲げてくれている。それらを参考にして、*1 Contention*、*The True Tragedy* を再構築した役者達の所属する劇団のレパートリーを一部再現してみる。⁹

1 Henry VI[△]; *2 Henry VI*, *3 Henry VI* (*1 Contention* に *3 Henry VI* の、*The True Tragedy* に *2 Henry VI* の recollected passages が混入しているということ)

Titus Andronicus[△]

The Spanish Tragedy[△]

Arden of Faversham

Edward II

Doctor Faustus[△]

Soliman and Perseda

Tamar Cham part 1? [△]

△をつけたのは、記録から1590年代初めに Strange's Men/Admiral's Men 合体劇団のレパートリーにあったことが判明している芝居である。Marlowe の *Edward II* が Pembroke's Men によって上演されたことは1594年の Q1 の表紙から明らかであり、この芝居が Strange's Men の所有した芝居とともに役者の記憶の中で混然としていた事実は、役者達が直前に所属していた劇団が Strange's Men か Pembroke's Men、あるいは Strange's Men を経由しての Pembroke's Men であることを示している。

これは Pembroke's Men が Strange's Men の分派であることを受け入れれば当然の帰結と言える。

従って、なぜ *1 Henry VI* にだけ Q 版がないかは、版權を Strange's Men が所有管理していたので、いわゆる海賊版として出版業者にテキストが流出することがなかったからと説明がつく。Pembroke's Men の所有していたことが分っているテキスト (*1 Contention, The True Tragedy, Edward II, The Taming of a Shrew*) が 1594-95 年に Q 版として出版され、一度に市場に放出されたのも、Pembroke's Men が前述したように 1593 年の夏に経済上の逼迫が原因で事実上消滅したことを考えれば時間的に符合する。一方、“ne Harey the vi” として Strange's Men が上演した *1 Henry VI* は劇場閉鎖令まで the Rose で人気芝居として上演され、その後ずっと Strange's Men の管理下に置かれ、1594 年の Lord Chamberlain's Men 結成と同時に、多くの役者とともに新劇団に移ったのである。*2 & 3 Henry VI* を Strange's Men が同じ様に所有していたのか、それとも Pembroke's Men の手に渡ったのかはさほど重要ではない。驚くべき事実は、シェイクスピアが Strange's Men あるいは Pembroke's Men のために書いた芝居のすべてが (*Henry VI* 3 部作, *Titus Andronicus, The Taming of a/the Shrew*)、シェイクスピアの所属したことが間違いなただ一つの劇団 Lord Chamberlain's Men の手に無事渡ったことである。シェイクスピアは自分の芝居の出版に無頓着であったという定説に挑戦する試みが最近見られるが、¹⁰ こと Strange's/Pembroke's Men の芝居に関して言えば、シェイクスピア自身がテキストの散乱を防ぐのに蔭で苦勞したと想像するのは決して根拠のないことではない。いずれにせよ、1623 年の F1 出版に至るまで *1 Henry VI* の存在を証明する Q 版がないことは prequel 説に頼らずとも、1592-94 年のロンドン劇団の再編成の経緯から十分に説明可能である。

次に取りあげたいのは “ne Harey the vi” の問題、特に “ne” の意味するところである。“Ne” が「新作」の意味なら、1 *Henry VI* の初演は1592年3月1日と決定し、F1 ヴァージョンでの執筆順序を弁護するなら、Greene のパンフレットの the Stationers' Register 登録日9月20日、あるいは6月の劇場閉鎖令が2 & 3 *Henry VI* 執筆、上演の最終期限となる。

“Ne” の意味の解釈は大別して三つある。(1) 完全な “new play” の意味で、その芝居の初演であることを意味する。(2) 新しく改訂された旧作、書き足されたり部分修正された芝居の再演の意味で “new” とする説。(3) 新しい劇団による他劇団の旧作の再演だとする説。Henslowe の “ne” の使用上の習慣が最も大きな決め手となると考えられる。*Henslowe's Diary* のエディター R. A. Foakes は “One possibility which covers all occurrences of ‘ne’ is that this refers to the licensing of a play-book for performance by the Master of the Revels” としたうえでさらに “A license was required for a new play, presumably for a revival, at least when substantial revision had been made of the play” と続けている。¹¹ 興行主 Henslowe にとっての最優先事項は、Privy Council の権威を背後にロンドン市内での劇団の活動を一括管理していた the Master of the Revels とのトラブルを避けることであろう。これは商業的利益にも優先する。The Master of the Revels とのトラブルは劇場閉鎖、公演禁止に直結する火種となりかねない。特に旧作に何らかの改訂を加えたものを再演するには細心の注意を払ったろう。The Master of the Revels, Henry Herbert の公式記録に、旧作に新しい場面を加えて新作として上演することを許可する名目で、the Fortune 劇場の興行主から更新料を受領したという記述がある。¹² さらに、(2) と (3)

が重なりあう場合もありうる。1594年1月24日、the RoseでSussex's Menのシーズン中、Hensloweは“ne Titus & Ondronicous”と書き込んでいる。これは明らかにシェイクスピアの*Titus Andronicus*である。*Titus Andronicus*は前述したようにStrange's Men, Pembroke's Men, Sussex's Menの順で上演されたことが分っており、Hensloweは“ne”を他劇団の旧作のSussex's Menによる再演の意味で用いている。*Titus Andronicus*の初演をこの時とするのには疑問の声が多く、シェイクスピアがStrange's Menのためにだいぶ前に書いたものに、F1テキストの3幕2場(Q版にはない)、タイタスと蠅のエピソードを加筆したものがこの時初めて上演されたと考えることもできる。¹³

以上の理由から、“ne Harey the vi”が、シェイクスピアがStrange's Menのために書いた*1 Henry VI*に何らかの編集、加筆などの改訂が施された、新しいライセンスを必要とする芝居だったという仮説が成り立つ。加筆されたとすれば、*1 Henry VI*の中で文体上他から抜きんでいて、*1 Henry VI*共同執筆説をとる時いつもシェイクスピアの筆になるとされるTemple Gardenの場面その他を候補にあげることができる。いずれにせよ、*1 Henry VI*の執筆、初演時期は1592年3月に束縛されず、1590年代のもっと早い時期、場合によっては1580年代にまでさかのぼることが出来る。この早い時期を起点としてヘンリー6世劇がF1の順番で3部作として書かれたというシナリオがごく自然なものになる。中にはそれでもprequel説に執着する人もいる。確かにこれまでの本稿の議論は劇団の再編成、それに伴うテキストと版權の移動、Hensloweの記載項目の解釈という、いわばテキストの外の要因を中心に行われてきた。ここでテキスト自体に目を向け、ヘンリー6世3部作に書きこまれているナラティブの一貫性、作品としての連続性の統一を全く無視しなければそもそもprequel説は成り立たないという致命的欠陥を指摘しなくてはならない。

まず*1 Henry VI*→*2 Henry VI*という順序はありうるがその逆はあり得ないという例である。問題になる箇所は*1 Henry VI* 2幕5場と

2 *Henry VI* 2幕2場である。前者では後の Duke of York がロンドン塔に幽閉されている Edmund Mortimer を訪れ、York 家の国王継承権が家系序列の上で正当性を持つことを知る。Mortimer はすべてを話して息絶える。一方後者で、同じ York が Salisbury と息子の Warwick を York 家の支持者にするため、家系上本来自分が継ぐべき英国王の地位をヘンリー6世が不当に奪っていると説得する場面がある。ここでは Edmund Mortimer はウェールズの Owen Glendower との戦いで捕虜となり、一生をウェールズで幽閉の身で過ごしたことになる。明らかな矛盾であるが、この種の矛盾はシェイクスピアにはつきもので、特に問題とするにあたらぬ。しかし1 *Henry VI* と2 *Henry VI* の順序を決定するにあたってこの矛盾は大きな意味を持つ。2 *Henry VI* では、Edmund Mortimer は Richard II 以降の王位継承候補者の長い系譜図という鎖の一つの輪に過ぎず、1 *Henry VI* の生身の歴史の証人、語り部としての重さを持っていない。シェイクスピアが2 *Henry VI* で矛盾を犯したとしても、前作からの時間経過を考えれば、起こりうる間違いとして黙過することができる。

これが順序が2 *Henry VI* →1 *Henry VI* の場合、間違いは重大である。Edmund Mortimer は Owen Glendower の捕虜として死んだのなら、Mortimer がロンドン塔に幽閉され、その彼を York が訪れるというシナリオ自体が全くナンセンスになり、1 *Henry VI* の Temple Garden での York の父 Earl of Cambridge の大逆罪に関するいさかい、それに続く Mortimer による York, Lancaster 家の歴史の解説、York の王権への野心の芽生えという、薔薇戦争というヘンリー3部作を貫流する基調テーマの中核となる部分が崩壊してしまう。そこまでシェイクスピアが能天気であったとは考えがたい。2 & 3 *Henry VI* は明らかに2部作の体裁を成しているので、1 *Henry VI* →2 & 3 *Henry VI* の順で書かれたことの一つの裏づけとなる。

もう一つ興味深い箇所を見てみよう。2 *Henry VI* 4幕8場で Old

Clifford は Jack Cade に率いられてロンドンに攻め入った群衆に向けて武器を捨て、ヘンリーに恭順の姿勢を示すよう説得する。その際群衆の心をつかみ、Cade から離反させるのに Old Clifford が用いるレトリックの戦術は前王ヘンリー 5 世のフランスでの栄光の記憶に訴え、ひるがえって現在の内乱の隙を見計らってフランスがイングランドに攻め入るという危機感をあおり、群衆の愛国心を鼓舞することである。“To France, to France, and get what you have lost!/Spare England, for it is your native coast.” (49-50) *1 Contention* でも Old Clifford はこれに近い台詞を発しているが、非常に短く、ヘンリー 5 世への言及は全くないので、そのインパクトは F 版と較べものにならない。2 *Henry VI* の Clifford の台詞は明らかに聴衆の記憶にヘンリー 5 世のフランスでの偉業、ヘンリー 6 世治下でのフランス失地が鮮明であることを前提にしている。1590年当時、ヘンリー 5 世のフランス遠征を題材にした芝居として現在知られているのは Queen's Men の *The Famous Victories of Henry V* があるが、Strange's Men/Pembroke's Men が他劇団の芝居の評判に頼ると考えるのは難しく、やはり、先行する *1 Henry VI* のフランスでの Talbot の英雄的武勲と先王ヘンリー 5 世礼讃を念頭に置いたシェイクスピアの企てであったと考えるべきであろう。¹⁴ ちなみに“ne Harey the vi”から遅れること 5 か月後の 1592 年 8 月に the Stationers' Register に登録された“Pierce Penniless His Supplication to the Devil”の中で Thomas Nashe が、Talbot のフランスでの活躍をテーマにした芝居がロンドンで大当たりをとったことに言及している。このパンフレットが Strange's Men の当時のパトロン Ferdinando, Lord Strange に献呈され、しかも同パンフレットで Nashe が Strange's/Admiral's Men 合同劇団の目玉役者 Edward Alleyn に最大級の賛辞を贈っていることから、Nashe の念頭にあったのが Edward Alleyn が Talbot を演じた the Rose での *1 Henry VI* であろうというのが大方の見解である。Nashe の Talbot 礼讃は *1 Henry VI* 初演の興奮さめやらぬ記録ととられがちだが、彼が観た

のが旧作の改訂後の再演と考えても全く不都合はない。

5

Nashe のパンフレットに触れたことで、フランスでの Talbot の活躍と Strange's Men のパトロンである Ferdinando, Lord Strange の名前が出た。実はこの両者は *1 Henry VI* 成立のまだ十分に探求されているとはいえない側面へ我々を導くキーワードである。ヘンリー 6 世 3 部作は薔薇戦争の始まりの経緯から物語が展開し、次に続く *Richard III* でチューダー朝の始祖 Richmond、後のヘンリー 7 世の勝利で内戦に終止符がうたれるまでの歴史を描いている。この 4 部作の中で *1 Henry VI* のみが、フランスへの英国軍遠征、さらにヘンリー 5 世の領土的遺産を、若年のヘンリー 6 世の政治的リーダーシップ欠如がもとで失うという事件を扱っている。特にヘンリー 5 世に代って Talbot が国民的英雄として、イギリス人にとっては「魔女」「悪魔に魂を売った女」である Joan de Pucelle と対決する“Talbot play”としての性格が強い。

そうした *1 Henry VI* が 1590-91 年に書かれたことは同時期のフランスでの英国軍の軍事活動と無縁ではない。1589 年フランスのカトリック王 Henry III が暗殺され、プロテスタントの Henri of Navarre が国王となった。フランスのプロテスタント勢力の援護という名目で 1589 年には Lord Willoughby の軍がフランスに送られた。1591 年大きな期待を背に Essex が Dieppe に兵を率いて上陸し、10 月には Rouen の城攻めがあった。翌年 4 月 Rouen がスペインの Duke of Parma の手で解放され、幻滅した女王によって Essex が英国軍の指揮を解かれて召還されるまで、海峡の向こう岸の戦いのニュースは国民的関心ごとだったのである。*1 Henry VI* はある意味で戦場報道の代換メディアの役割も果たしたと言える。*1 Henry VI* で描かれている Talbot の Rouen 城攻めに酷似した軍事行動が事実海の向こうで行われていたのである。実際、*1 Henry VI* での

Rouen への言及の多さは異常で、3幕2場だけで Rouen という言葉が少なくとも8回台詞に現れる。勇み足的な歴史改竄もある。3幕2場の Talbot による Rouen 再占領は Hall や Holinshed の年代記に反する。¹⁵ 実は Rouen は Talbot ゆかりの地でもある。4幕7場で戦死した Talbot の称号の長いリストが紹介される場面があるが、このリストは Rouen の Talbot の墓碑銘に基づくもので、旅人の報告からある程度観客に馴染みのあるものだったと想像できる。

ここで浮上してくるのが *1 Henry VI* の Strange コネクションである。*1 Henry VI* でその活躍が描かれている John Talbot, 1st Earl of Shrewsbury の直系の子孫である George Talbot, 6th Earl of Shrewsbury は1590年に亡くなっている。*1 Henry VI* 3幕4場でヘンリーが Talbot に Earl of Shrewsbury の称号を与えている。エリザベスに信任厚く、Mary Stuart 幽閉の際の監視責任者でもあり、彼女の処刑監督者でもあった George Talbot への何らかの讃辞が込められているのかもしれない。¹⁶ Lord Strange の Stanley 家は古くからフランスで戦った Talbot と血縁関係があることを誇りとし、事実 *1 Henry VI* の Talbot の称号のリストの中の Lord Strange of Blackmere は Strange 家の歴代の息子達が使用したものである。¹⁷ Nashe が特に名指しで Talbot の武勲を絶賛しているのは、パンフレットを献呈したのが Lord Strange であったことを十分意識してのことだろう。

1 Henry VI を最初に上演したのが Strange's Men なら、シェイクスピアがロンドンに出て最初に接触し、役者／劇作家として深い関係を持ったのが Strange's Men であるという仮説が成り立つ。いわゆるシェイクスピアの“Lost Years”をめぐる議論の中で、現在最も記録、文献上の裏づけがある仮説は、シェイクスピアがランカシャーの Houghton 家に奉公し、その後同地の Stanley 家で従僕／役者として仕え、最終的に同家がパトロンの Lord Strange 劇団に加わったとする説である。この真偽は別として、このシナリオの支持者である Honigmann の指摘する

Richard III と *Love's Labour's Lost* での Strange/Derby 家に対する様々に形をかえた讃辞の解析には説得力がある。¹⁸ *Richard III* では Lord Stanley は後のチューダー朝開祖ヘンリー7世の義父であり最大の庇護者である。2 & 3 *Henry VI* では父子の二人の Clifford が Hall や Holinshed に記録されている以上に重要な役割を果たす。Ferdinando の母 Margaret は Clifford 家から嫁いだもので、歴史上のヘンリー6世の時代まだ無名だった Stanley 家に肩入れする手段は Clifford 家の人々を英雄視するほかになかった。Lord Strange がシェイクスピアの最初のパトロンだったと仮定すれば、力弱い国王を文字どおり身を挺して守る二人の Clifford の活躍は Ferdinando にとって満足のいくものだったに違いない。

6

ヘンリー6世3部作の成立の過程を明らかにする作業はまだ半ばだが、ここまでの推理と仮定をまとめてみる。我々の現在知る限り、シェイクスピアが最初に接触を持った劇団は Strange's Men と考えられる。彼等のために *1 Henry VI* がまず最初に "Talbot play" の性格を濃厚にした形で書かれた。時期は1590-91年、あるいはそれより前にさかのぼるかもしれない。ロンドンで劇作家としての実績の全くない駆け出しの作家が単独で仕事を委託されるとは考えにくい。*1 Henry VI* は多くの人が言うように他の劇作家との合作であろう。シェイクスピアはこの時から劇団のパトロンである Ferdinando, Lord Strange への讃辞をヘンリー6世劇に織りこむことを計画していた。パート1の Talbot、パート2、3の Old Clifford, Young Clifford はその主たる媒介となった。シェイクスピアがそもそもヘンリー6世と薔薇戦争の題材に興味を引かれた理由はこれから解明しなくてはならないが、*1 Henry VI* に関する限り、フランスでの Essex らによる軍事行動の話題性が大きなファクターとして働いたことは

確かだろう。いわゆる prequel 論は否定されたので、*1 Henry VI* 初演の後、*2 & 3 Henry VI* が書かれ、かつ上演されたと思われる。上演された劇場は1591年5月に Burbage と Alleyn の仲たがいがあるまで Strange's/Admiral's Men が公演を行っていた the Theatre が第一の候補である。これ以降 Strange's Men は Henslowe の the Rose へ居を移し、1592年の劇場閉鎖令が出るまでレパートリーを組んで連続公演を行った。この間に *1 Henry VI* のみの再演があり、Henslowe の “ne Harey the vi” として記録に残った。この際 Temple Garden の場面、Margaret と Suffolk の出会いの場面など、次の *2 & 3 Henry VI* の薔薇戦争の布石になる部分がシェイクスピア単独で加筆されたと考えられる。Henslowe の “ne” は改訂による旧作の再演の意味である。Henslowe の日記には *2 & 3 Henry VI* の上演の記録はない。この二つの芝居が Strange's Men の分派である Pembroke's Men の手に渡り、すでに Strange's Men のレパートリーにならなかったのかもしれない。いずれにせよ、*1 Henry VI* と *2 & 3 Henry VI* のテキストは別々の運命をたどる。前者はずっと Strange's Men によって管理され、1594年の Lord Chamberlain's Men の結成と同時に多数の役者と同時に Lord Chamberlain's Men に移った。後者は Pembroke's Men の手に渡り、もしかして地方巡業の折上演されたかもしれない。いずれにせよ1593年夏 Pembroke's Men が破綻した時かそれ以前に、*2 & 3 Henry VI* の台本は親劇団である Strange's Men に戻ったと考えられる。Pembroke's Men に属していた役者達が記憶に頼って *1 Contention*、*The True Tragedy* として *2 & 3 Henry VI* を再現せざるをえなかったという事実がそのことを物語っている。こうして無事 Lord Chamberlain's Men の所有することとなったヘンリー6世3部作は、多分新作 *Henry V* の上演にあわせて少なくとも *1 Henry VI* が再演されるという僥倖を経て、1623年の F1 で始めて3部作の体裁を持って読者の前に登場したのである。

NOTES

¹ *The Complete Oxford Shakespeare*, eds. Stanley Wells and Gary Taylor (Oxford: Oxford Univ. Press, 1987), vol. 1 Histories. Wells と Taylor は prequel 説支持者なので、3 部作の順は *1 Contention*, *The True Tragedy*, *1 Henry VI* になっている。その理由については二人の *William Shakespeare: A Textual Companion* を参照。

² “Ne” の解釈の少数派としては、Oxford Shakespeare のエディター Wells/Taylor の “new in London” (*A Textual Companion*, 92)、あるいは Winifred Frazer (“Henslowe’s ‘ne’”, *Notes and Queries* 236, 1991, 34-35)、それを支持した Brian Vickers (*Shakespeare, Co-Author*, Oxford: Oxford Univ. Press, 2002, 149) の “Newington Butts” (ロンドン郊外北の劇場) 説がある。

³ 以下シェイクスピアの芝居からの引用はすべて Riverside Shakespeare 第2版による。

⁴ このシナリオが全く現実的でないとも言いきれない。Drayton と Dekker 共著の *The Civil Wars of France* 3 部作は現存していないが、約4か月という短期間で3部作が完成し、報酬が支払われ、しかも “the first Introduction” という名前の prequel の芝居が発注されている。(*Henslowe’s Diary*, ed. R. A. Foakes, Cambridge: Cambridge Univ. Press, 98f.) かなりの短期間で3つの芝居の脚本がそろそろ例があるということ。しかし上演というファクターを考慮すれば、かなりきつい日程であることに変わりない。

⁵ E. K. Chambers, *William Shakespeare: A Study of Facts and Problems* (Oxford: the Clarendon Press, 1988 [orig. 1930]), vol. 2, 314.

⁶ Scott McMillin and Sally-Beth MacLean, *The Queen’s Men and Their Plays* (Cambridge: Cambridge Univ. Press, 2000 [orig. 1998]), 29, 61, etc. この他に G. M. Pinciss, “Shakespeare, Her

Majesty's Players and Pembroke's Men", *Shakespeare Survey* 27 (1974), 129-36 と David George, "Shakespeare and Pembroke's Men", *Shakespeare Quarterly* 32 (1981), 305-23 も Queen's Men の分裂と Pembroke's Men を関係づけている。

⁷ 最初に John Dover Wilson が提示したもので、Andrew Gurr (*The Shakespearian Playing Companies*, Oxford: the Clarendon Press, 2003 [orig.1996], 267-273), Randal Martin (Oxford Shakespeare 3 *Henry VI*, 126)、Roger Warren (Oxford Shakespeare 2 *Henry VI*, 62f.) などが採用している。

⁸ *Titus Andronicus* Q1 の表紙には "As it was played by the right honourable the Earl of Derby [1593年 Ferdinando, Lord Strange が Earl of Derby となり、劇団名も以後 Derby's Men となった], Earl of Pembroke, and Earl of Sussex their servants" とあり、これを 3 劇団の合同公演とする解釈も存在する。e.g. Jonathan Bate ed., *Titus Andronicus*, Arden 3rd series, 74-77.

⁹ 参考にしたのは Andrew Cairncross の Arden 2nd series の 2 & 3 *Henry VI* の appendix, Michael Hattaway の New Cambridge Shakespeare 2 & 3 *Henry VI* appendix "Recollection of lines from other plays", Ronald Knowles の Arden Shakespeare 3rd series 2 *Henry VI* の appendix "Recollections in *The Contention*" である。三人とも *Richard III* をリストに含めているが、*Richard III* の台詞の記憶による混入と決めるには、*Richard III* と 1 *Contention*, *The True Tragedy* の対比されているパッセージの類似があまりにも一般的、部分的なので、このリストから省いた。*The Spanish Tragedy* は *Jeronimo* のタイトルで 1592 年の the Rose でのシーズンに Strange's Men によって上演されている。*Tamar Cham* は、part 2 が *Henslowe's Diary* で 1592 年 4 月 28 日 Strange's Men によって初演されていることが分っているが、part 1 に関しては筋書きだけを板に書いた、いわゆる "plot" と呼

ばれるものしか残っておらず、これは1602年に Admiral's Men が用いたものと推量されている。(E.K. Chambers, *The Elizabethan Stage*, vol. 4, 47-48)

¹⁰ David Kastan, *Shakespeare and the Book* (Cambridge: Cambridge Univ. Press, 2001): Lukas Erne, *Shakespeare as Literary Dramatist* (Cambridge: Cambridge Univ. Press, 2003).

¹¹ R. A. Foakes ed., *Henslowe's Diary*, introduction 34-35.

¹² G. E. Bentley, *The Profession of Dramatist in Shakespeare's Time, 1590-1642* (Princeton: Princeton Univ. Press, 1971), 138.

¹³ E. M. Waith (Oxford Shakespeare *Titus Andronicus*, 1984)はこの意見。E. K. ChambersはSussex's Menの上演の時に現在の形に書きかえられたとするが、誰の手によるのか、3幕2場がこの時書き加えられたのかには触れていない。(Chambers, *William Shakespeare*, vol. 1, 319)

¹⁴ 今ひとつ考えられるシナリオは、のちの *Henry IV*, *Henry V* のサイクル劇上演にあわせて *Henry VI* 3部作のすべて、あるいは一部の Lord Chamberlain's Men による再演があり、その時ヘンリー5世礼讃が新たに *Henry VI* 劇につけ加えられたとも考えられる。しかし *1 Contention* の Clifford の台詞にすでにフランスでの過去の栄光への言及があり (Then haste to France that our forefathers won,/And win again that thing which now is lost)、*1 Contention* の元になる *Henry VI* にそれ以上に強いヘンリー5世の偉業に訴える台詞がなかったとは考えにくい。

¹⁵ Dominique Goy-Blanquet, *Shakespeare's Early History Plays: from Chronicle to Stage* (Oxford: Oxford Univ. Press, 2003), 27.

¹⁶ この辺の事情に関しては Emrys Jones, *The Origins of Shakespeare* (Oxford: the Clarendon Press, 1977), 120-21に詳しい。

¹⁷ Roger Warren ed., *Oxford Shakespeare 2 Henry VI*, 70. Warren は Stanley 家が Talbot を主人公にした芝居をシェイクスピア、あるいはシェイクスピアを含む複数の劇作家に依頼した可能性もあると言っているが、根拠となる裏づけは弱い。

¹⁸ E. A. J. Honigmann, *Shakespeare: the 'Lost Years'* (Manchester: Manchester Univ. Press, 1985), 63-69.